

SRID NEWSLETTER

No.297 JULY 2000 国際開発研究者協会 創設者 大来佐武郎
〒102-0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

三題話し：近代化・アフリカの貧困・援助

堀内 伸介

なぜ今貧困かという問いに対して、アカデミックな議論は文末の論文をご覧になることを最初にお勧めいたします。貧困の問題は近代化の過程の中で認識されるものと思っております。近代化はルネッサンス、宗教革命の文化的、社会的な変革があり、個の確立、人間の尊厳などが認識され、その価値観が普遍化して、人間の尊厳との対比において貧困問題があります。次に近代化の中の政治的な改革が始まり、その落ち着き先は民主化（民主主義が欧米に確立されるまでには、200年以上も掛かりましたが、）であり、その流れの中で個の人間の権利、参加の権利が奪われることが貧困の問題としてあります。次に産業革命による経済の近代化がおこり、資本主義、自由経済が大きく人間の生活を変えましたが、低所得、所得格差の問題が提起されてきました。今世紀に入り、社会的文化的な近代化、政治的な近代化、経済的な近代化は欧米を超えて広がりました。決して一直線ではなく、社会主義、共産主義による富の分配、人間の権利についての問題提起は、ベルリンの壁がなくなった今でも残る命題であると思えます。

トルーマンとスターリンに始まる東西の冷戦は、あまりにも大きな政治的な対立であり、ここ50年間に育った私のような者は、冷戦のメンタリティー、国と国の対立の構図から国際問題を見ることからなかなか抜け出せません。（だからジジイは早く引っ込んでいろうと言う声も良く聞こえます！）冷戦も近代化と言う大きな流れの中に飲み込まれ、再び国境を越えた人間社会の問題が取り上げられるようになったと思えます。その中で、貧困も大きな命題として取り上げられています。（すでに1960年代のアメリカでは公民権運動の中で貧困は取り上げられました。）

国際関係から見ればウエストフェリア秩序が崩壊し始めており、今は新しい国際秩序を求めて模索の時代とも言えます。技術革新に伴った経済面で国境は低くなりつつありますが、他方、国境の数や紛争は増えつづけています。これが新たな貧困問題を引き起こしている事も注目されます。

さて、大変前置きが長くなりましたが、アフリカについて言えば、明治維新の様に、まず経済的近代化が始まり、政治的近代化は、緒についたばかりであり、社会的思想的な近代化は遠い存在です。近代化の順序が逆であるために色々な問題が起こっています。独立以来の国のあり方、政治指導者の質などがアフリカの貧困の遠因ではありますが、貧困の原因に入るとさらに長くなるので、貧困対策に言及したいと思います。

現在のサブ・サハラ・アフリカの貧困は、（アフリカと一言で一般化することは、少々抵抗がありますが、）農村部で特に深刻であり、中期的には経済開発を軌道に乗せるためには、先ず農村部の貧困の削減が必須です。特に小農、女性世帯農家などが食糧の生産者であり、このグループの生産性の向上と農村部における非農業部門の生産性の向上が鍵となります。貧困は単に所得、消費のレベルが低い事ではなく、社会的な疎外・孤立、依存、差別などが貧困を持続させているわけであり、当然の事ながらこれらに対する対応、エンパワーメント、安

全の措置が取られる必要があります。

農民は決して貧しくなく、農村部に貧困状態が存続する政策的・制度的バイアスを取り除き、自助努力を政策的に支援するならば、より良い生活を築いて行く事が出来る大きな潜在能力を持っています。

マクロ政策レベルの見直し(農業政策、税制、関税、為替政策、輸出入政策等の政策レビュー)、市場へのアクセスのためのフィー道路、生活に身近な村落道路、初等・中等教育、飲料水供給等の基礎インフラや保健・医療サービスへの支援、農業用小規模金融制度の拡充、農業協同組合、婦人クラブなど農民組織化への政策アドバイス、ここの援助は小規模でも包括的に実施する事によって効果を上げる事が出来ると思います。援助の実施にあたっては、中央政府や地方政府、市民団体、地元 NGO、受益者である貧困層との徹底的な対話が不可欠です。全ての過程に貧困層自らが参加、オーナーシップ(主体性)をもつことが、貧困削減の鍵です。

われわれが持つ技術に合う途上国の問題を探して、援助する一supply driven—は限界にきています、貧困層の問題を正確に理解して、その解決策を試行錯誤で開発することを効果的に支援する一demand driven—ことが求められていると考えます。農村部の貧困層の所得が向上し、国内市場として育ってきたときに、自律的な経済成長が貧困を解消して行く事になることを期待しています。

Why is Inequality Back on the Agenda? By Ravi Kanbur and Nora Lustig, (世銀のweb siteからdown load出来ます)

ウズベキスタンより

E B R D タシケント事務所長、シニアバンカー

中沢賢治

1. ウズベキスタンの印象

昨年4月にシルクロードの国ウズベキスタンの首都タシケントに赴任しました。赴任直前の2月16日 カリモフ大統領の通勤ルートで6発の爆弾。家探しを兼ねて街の様子を見に行く矢先の出来事でした。ウズベク人、ロシア人、タジク人(ペルシャ系)、タタール人、ユダヤ人、韓国人等々が見事に融合したかに見えるこの国の中央政府にとって、人口2千4百万人を抱える国家の統合を維持し、イスラム原理主義グループの反政府活動を如何に統制するかが重要な課題となっています。

初めて空から見た夜景のタシケントは、予想外の大都会でした。さすがに旧ソ連第4番目の街です。赴任後間もなくの6月、EBRD 総裁のウズベク訪問で、カリモフ大統領との会心の準備など緊張の連続。総裁のお伴でチムール帝国の古都サマルカンドを訪問。井上靖氏の小説で読んだ、青いタイルの遺跡を目の当たりにして、感激もひとしおでした。

タシケントはオアシスの街。地元の人たちは天山山脈からの水が豊富だと言って毎日水道の蛇口を開けっ放しで庭に散水します。砂漠の国なのに、節水という感覚は皆無。街角のいたるところで花屋が開店。春にはアンズと桜。初夏にはバラとグラジオラスが咲き誇ります。

2. EBRD タシケント事務所の活動

当事務所の2代目所長として赴任した私にとって、総額5億7千万USD(上る投融資の資産価値を減ずることのないように情勢分析、モニタリングを行うと共に、新規プロジェクトの可能性を探ることが、日々の課題です。EBRDの定款には健全経営(コストを度外視した政策融資はしない)、市場経済移行への貢献、アディナリティ(既存の金融機関と競合しない)、環境改善への貢献などの諸原則が盛り込まれているため、6ヶ月ごとのプロジェクト報告もそれぞれ30-40頁に及びます。

16人の所員で手分けして、本部の様々な指示を処理します。

この国が今抱える課題は、1996年に導入された為替非自由化による様々な弊害をどう克服していくかにあると言えます。金と綿花を主力輸出商品とするこの国はこれら主要品目の国際市況低迷に苦しみ、外貨準備不足に瀕した国内経済の防衛策として、徹底的な為替統制を行いました。一時的な措置であったはずのこれら諸施策が3年を経過すると、その弊害も著しく、様々な外国企業がいまやそのビジネス拠点をタシケントから隣国カザクスタンのアルマーティに移しつつあります。政府も事態を憂慮し、複数為替の一本化、闇為替市場の合法化に向けて今年に入って様々な諸策を打ち出しています。しかしながら IMF が主張するような制度改革を含む解決は、来年以降になるものと見られています。

3. タシケントの生活

タシケントはテニスが盛んです。大統領杯のトーナメントには英のルゼツキーなどの一流選手が出場。立派なコートが街のあちらこちらにあります。IMF や各国大使館との情報交換では、テニスをしながら面白い話が入って来ることも多いです。また中央アジア唯一のゴルフ場（18ホール）は、雪山を望む美しいコースで気分転換には最高。ゴルフ人口はまだまだ少なく、週末のコンペは韓国、日本の駐在員がほとんどです。妻は地元のバザール（市場）で毎日の料理の買い物をします。韓国人が多いクリュックバザールでは、なぜか「献上米」という名前の美味しい米を売っています。地元製の豆腐もレストランで買えます。通りにならぶ西瓜とメロンは夏の風物詩です。果物と野菜はとても豊富なので食事にはほとんど不自由を感じません。ただしタシケントにはナマズ以外ほとんど魚がないため、ロンドンの魚屋で鮭などを冷凍してもらい、発泡スチロールの箱につめてタシケントに持ち帰るなど工夫しています。

以上の通り報告します。百聞は一見に如かずです。タシケントまでお出かけ下さい。

一万年の旅路：ネイティブ・アメリカンの口承史 (ポーラ・アンダーウッド著) を読んで

(財) 国際開発高等教育機構 湊 直信

世界の人々の暮らしぶり、文化、文明、宗教、言語は多様である。しかし、この多様性はいつ頃から始まったのだろうか。人類の歴史について、数々の発掘、文字の解読の結果、現在より約8千年前からナイル川流域に農耕文化が起こり、約5千年前に統一国家が成立したこと、ティグリス、エウフラテス両河流域地方にも約6千年以前に文明が発展したこと、約7千年前に黄河、揚子江流域で定住農耕が開始されたことなどが解っている。だが、それ以前の我々の祖先についてははっきりとした姿は描けていない。人類の古代史を知るためには、考古学だけでなく、人類学、地球物理学等、様々な学問分野で掘り所を探る必要がある。近年、着目されているのが、宗教的逸話や古くから伝えられている民族的伝説である。特に、後世の者に正確に内容を伝えること自体を目的とする宗教的神話や民族の歴史は、その信憑性も高い。

アメリカ5大湖のほとりに住むネイティブ・アメリカンのイロコイ族は先祖の歴史を口承で伝える伝統技法を持ち、代々それを伝えている。現在、父から一族の歴史を受け継いだポーラ・アンダーウッドという女性が、その内容を初めて活字に記録したものが「一万年の旅路」である。

話は、今から一万年頃、彼らの先祖がそれまでに定住していた海辺（筆者は東アジアを想定）から、まだ水面の高さが低かった頃の海（ベーリング海峡）を島づたいに渡って北米に移動する物語から始まる。北米大陸に到達した一族は数千年かけて南下し、西海岸に到達し、そこからまた数千年かけて、アメリカ大陸を西から東に横断し、今から3千年前にオンタリオ湖南岸に定住する。

旅のきっかけは、突然の津波である。海辺（東アジア）で生活していた一族は、知恵のあるリーダーが浜辺で、知恵のない者が丘の上で生活していた。ある日、大きな津波で浜辺

のリーダーを全て失い、今まで彼らに従っていた知恵のない者達が、津波の恐怖から逃れるため、内陸部に向かって移動を始めたことにある。当時、彼らは何も知らなかったが、一万年の旅の中で常に学ぶ姿勢だけは持っていた。知恵を持つリーダーを欠いたために、意思決定する際、仲間の合意をとり、自分達の目的をはっきりさせ、一致団結するという習慣を身につけるようになった。

一族は自らを「歩く民」と考えていたが、ユーラシア大陸の内陸部では騎馬民族に会い、驚嘆し、彼らを恐れた。アメリカ大陸の太平洋岸で船に乗る民族を、水の上を渡っていると思い、好奇心から彼らの行動を観察した。また、言葉が全く通じない民族にも数多く出会っている。

この本には、更に東アジア付近に定住するはるか昔（約2万年前の地中海沿岸と想定）の民族の生活ぶりについても述べられている。この地では、民族によって、人々の背の高さ、肌の色、髪の毛の種類、足の形、が大きく異なっており、互いに言葉も通じなかった。しかし、この違いを超えて、他の民族からも学ぼうとしている。さらに、人間からだけでなく、水の中で魚を捕まえたり、泳いだりするのに＜大いなる泳ぎ手＞（イルカではないかと思う）と一緒に泳ぎ、泳ぎ方を学んでいる。ユーラシア大陸を東に進む途中、それまで風除けに使っていた毛皮をある男が衣服のように身にまとったきっかけ、他の人々はその男を熊と思い、彼が毛皮を脱ぐのを見て熊が毛皮をはいだと、仰天するはなしもある。

他にも多くのエピソードが載っているが、彼らの発想や行動は非常に素朴であるが常に真剣である。何かを学ぼうと向上心を持って生きて来たことが解る。まるで、タイム・マシンに乗って、古代の人々の生活を垣間見たような一冊である。

お知らせ

1. 会員の森田 綾さんがご結婚され 鈴木 綾さんになりました。
2. シンポジウムに参加される方は、まで7月25日（火）にA4, 1枚の発表用レ
3. ジメを事務局 03-5226-0620にfax 送信下さるか、
s r i d j i m u @ p a r . o d n . n e . j p にメールしてください。
7月25日（火）までに用意できない方は、当日40部コピーを持参してください。